〝鍍金緑松石象嵌獣形盒硯〟試探

西林昭一

いささか旧聞に属すが、昨年の春と夏に東京と京都の国立博物館で、中華人民共和国古代青銅器展が催された。日中国交恢復後二度目の大がかりな展観で、文化大革命中発見の殷周から後漢にいたる出土文物を主とし、唐代の金銀器も出陳された。中にはその前年に発見された始皇陵東側陶俑坑出土の武人陶俑や陶馬も置かれていた。私などはとても一度では頭に入らず、東博に二度、京都にも一度観に出かけた。もっぱらの興味は、金文の択影にあったのだが、各代諸青銅器の多様さには、ずいぶんと興奮させられた。その折の展観品で、いまも忘れられないものが三器ある。

一は江蘇省漣水前漢墓出土の「臥鹿」。高五二センチ。三〇センチもあろう角を張り、前足を折り後足は腹側にかがめ、やや右に横坐りする写実的な姿態。くつろいだ風でいて警戒を怠らず、風のそよぎも聴きもらさぬように両耳はピンと聳て、目はつぶらに張っている。空間への緊張感をただよわせながらも、観る者に安らぎを感じさせる楚々たる造型であった。

一は雲南省江川前漢墓出土の「虎牛祭盤」。牛の背はゆるやかな凹状盤形で、一匹の虎が牛尾のつけ根にかぶりつき乗りかかっている。なのに当の牛は、みごとに張った角の重たげな首を前方にのべたまま、悠然とかまえている。ところが胴部はからっぽで、その腹の下、即ち盤下にくぐって、小牛が一頭こちらを向いて屈托なく立っている。そのおおどかで遠心性をもつ造型は、何とも特異な風趣であった。

一はここで取り上げる鍍金緑松石象嵌獣形盒硯（以下、銅盒硯と略称）である。そのおどろおどろしき異形は、私などおよそ机辺にそなえて愛玩できる代物ではない。漢代を通じての銅器の意匠は、みるところ、多くは現実生活の周辺に題材を取るようだが、これは例外と思われる一つであるのも珍らしかった。ただし展示の名標は〝獣形〟でしかない。

あれから一年半を経ても、この三器は印象に深い。とりわけ文房具の遺品として注目されるこの銅盒硯の異形は、頭から離

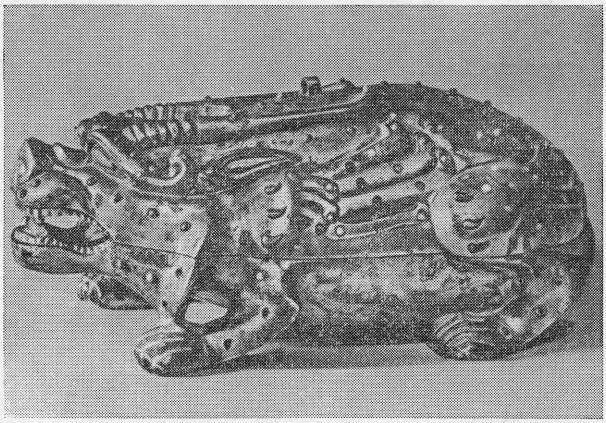

図1　鍍金緑松石象嵌獣形盒硯（文物出版『中国古青銅器選』）

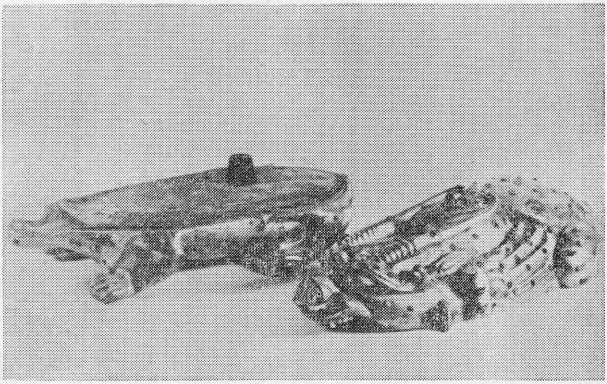

図2　同上開盒（坂田玄翔氏提供）

れない。本稿では、主として文革以後の資料に拠り焦点を硯とその〝獣形〟に据えて、鍍金と緑松石等の象嵌を付随的に考察してみたい。

◇

この銅盒硯は、高一〇、長二五センチ、重三、八五kg。名のとおり外側を青銅でしつらえたふたものの硯で、上半分は帯紐の蓋になっている。全形は、犬歯をもった歯をむき出して口は半開き、つぶれた獅子鼻の吼を開いてうなるかに、緑松石（トルコ石）を嵌めたらんらんたる切れ長の眉間をせばめた眼の上からは、長く先の鋭い角を二本、背頂まで伸し、先端は背骨に向って対角に背負い、心もち腰を落し、四肢をふんばって盤踞――というより今にも何かに飛びかかろうとする構え。充実した野性の力動感にみなぎっている。（現南京博物館蔵）。

この銅盒硯は、『人民中国』一九七一年十月号でカラー図版のみが掲げられ、ついで『考古』一九七二年第一期に、夏鼐氏の「無産階級文化大革命中的考古新発現」（中国簡化字は改めた。以下同じ）中に、約四分の一の白黒写真の挿図を載せて簡単に紹介された。[1] ついで『文物』一九七三年第四期には、呉山菁氏の「江蘇省文化大革命中発現的重要文物」に、も少し丁寧に紹介された。二誌を要して摘記すれば、発掘の年は一九六九年、出土地は江蘇省徐州市土山。磚室墓の随葬品から、墓主は

後漢の明帝の子で兄の章帝の遺詔により彭城王に封ぜられ、安帝の元初四年（一一七）に薨じた彭城王・劉恭、[2] もしくはこれに関係ある人。遺骸には銀縷玉衣が匣されていた。随葬品には、銅器、陶器、漆器、玉石器があり、銅器は執壺・銅盤・銅灯・銅壺・銅熏などで、あるものは鎏金、あるものは鋳の細小精緻な造型で、生き生きとした姿態の虎・鴿・熊・神獣である、と記され、二氏ともに随葬品中では銀縷玉衣と銅盒硯（呉氏は神獣と形容）を特記している。

ところで、一九七三年六月、東博で「中華人民共和国出土文物展」が開催された。これは日中国交正常化を記念して、中国から寄せられた初の文化大革命中の出土文物展であったが、ことにこの前年に発掘された馬王堆一号漢墓が、センセーショナルな話題を世界に提供したほとぼりの醒めぬころであったから、その豪華多彩な列品と、すでに満城漢墓の金縷玉衣の発見が人口に膾炙されていたため、徐州出土の銀縷玉衣の出陳に目をみはらされ、他の印象は薄れてしまうほどであった。がいま、その展観図録をみると、徐州漢墓出土品中の金象嵌銅筩、鳥獣足銅盉、雁足銅燈ほか、玉豚、銀盒がある。しかし銅盒硯は出陳されていなかった。なお図録には墓室の平面図が記されているが、銅盒硯は、どうやら前室の北西辺に置かれたようにみえる。見出しの説明では、すでに盗掘に遇っていたというから、随葬当時のままかどうかは明らかでない。

さて、銅盒硯は全面を鍍金し、[3] 変化の多い流雲紋を施した上、眼球、顔面、腹・背、四肢の外側面などに、多数の緑松石とそれに青金石・紅珊瑚が象嵌されている。

漢代青銅器の特色の一つに鍍金技術が挙げられているが、鍍金器は、各種の報告書や出版物に多数紹介されており、ことに満城漢墓にその尤品が多い。過眼したものを挙げれば、一九六二年山西省右玉前漢墓出土「酒温尊」、一九六五年江蘇省漣水前漢墓出土「犠尊」、一九六七年雲南省石寨山前漢墓出土「群猿銅鉈」、一九六八年河北省満城前漢墓出土「長信宮灯」、一九七四年河南省偃師後漢墓出土の、鍍金青銅製酒尊に納められた十二個の小品の麒麟・象・牛・馬・羊などである。

こうした鍍金技法は、春秋後期から戦国時代に発明され漢代に盛んとなった金銀錯技法より、後起の技法であるらしい。[4] しかし金銀あるいは銅の錯（象嵌）と平行して鍍金器も盛行した。銅盒硯もこうした漢代鍍金器の一連の作であるけれども、さらに緑松石等の象嵌を加えていることが、また注目される。

緑松石の象嵌は、つとに殷周青銅器にみられる。史樹青氏によれば、石錯銅器としては、古代常用の一種の装飾品で、漢代の「嵌緑松石鍍金銅斛」の銘文中、この緑松石をさして「青碧閔（玖）瑰」と称しているという。[5] この青碧は、『山海経』の

西山経に「高山其上多銀、其下多青碧」とあって、郭璞の注に「碧亦玉類也。今越嶲会稽県借山出碧」とみえる。史樹青氏がみるように青碧石が緑松石をさすとすれば、『山海経』注にいうその産石地の漢の越嶲郡は、今の四川省西昌県の東南である。ただし『後漢書』巻八八の西域伝〈大秦〉の条にも珊瑚、琉璃その他とともに青碧をあげている。[6] 大秦はローマ帝国をさすのが通説のようであるが、いま緑松石を俗にトルコ石と解しているように、その支配下のトルコ産なのかも知れない。緑松石の記録については、管見におよばないのでこれ以上詳しくしない。また銅盒硯の象嵌別石の青金石についても発掘遺品の珠飾品中に一件報告を知るだけで、[7] 出石についての記録を詳しくしない。仄聞では、ラピスラズエリと称し紺色不透明の中に少々金色のまじった石で、漢語の琉璃のことだという。ただし緑松石の出土報告は何件か知られる。以下時代を追って挙げれば……。

一九七二年青海省楽都県で発掘された原始社会の氏族公共墓第五四六号墓で、計九五件の出土品中、一塊の小緑松石があった。石斧類三件は両腿の中間に置かれているのに対し、緑松石は頸部に在る。墓群からは海貝・石貝などが出土することから、報告書はこの頃すでに貨幣による流通経済機構のきざしを指摘している。[8] この緑松石の位置から推して、墓主生前の宝重品であったことは想像される。一九七五年、安陽の殷墟で殷晩期の帝乙・帝辛時代と推定される地穴式および半地穴式の房屋が発見された。陶器、銅器にまじって玉、石、骨などの工芸品が多数伴出したのが特色であるが、中に骨笄で帽部に小片の緑松石を嵌めた一件と、緑松石製の牛頭が出土している。[9] また同年、やはり殷墟で大型の完整な王室関係の墓葬が発掘された。五号墓とよぶ。二百件に近い青銅器の出土もさることながら、五百件にのぼる玉石器の種々も随葬されていて、この種では最大級の発見であった。動物の小彫像が数十件あったが、うち二件の大理石製の水牛に緑松石が嵌められていて、もっとも珍貴な遺例だと紹介されている。[10] 一九七二年、一九七五年の二度にわたり、遼寧省朝陽で発掘された西周初期七一〇一号墓出土品中に管状の緑松石珠十二枚があり、ネックレスとみられている。[11] 一九七四年、陝西省戸県春秋初期墓出土の随葬品中に、玉石・骨器があり、うち串珠一串は玉片や鶏血珠に緑松石九個をまじえて組成されていた。[12] 一九七三年、江蘇省六合県東周楚国墓出土の銅剣三件の一つは、格頭の円盤状のところに松緑石が象嵌されていた。[13] 一九六五年、山西省長治県戦国墓出土品中、製飾石類に扁円の緑松石珠二枚と緑松石製の鳥一件、それに琉璃串飾一一八節中に緑松石を含むものがあった。[14] 一九七五年、四川省西昌県の戦国末から前漢初期と推定される墓葬出土品中に、瑪瑙や骨製の珠管に緑松石をまじえた一件の報告がある。[15] 漢代のものでは、一九七二年、雲南省江川前漢墓出土品――八百余件の青銅器中に緑松石象嵌器はことに多い――中、万余の瑪

璫・軟玉・緑松石を連綴した大小不同の長方形の珠飾で、覆蓋物に用いられたものがあった。[16] 一九七二年、甘粛省嘉峪関後漢二号墓出土品中、珠飾の琥珀と緑松石十個ずつがあったと報告される。[17]

こうした報告例からみて、緑松石は銅器の装飾用鑲嵌以外に、古くから身辺のアクセサリーとして使用されていたことが知られる。ただし単独で雕象されるものは少なく、多くは他の石珠とともに連綴された串飾品として制作されている。[18]

青銅器に鑲嵌された緑松石は、戦国末から漢代に限ってみても、報告書に散見するが、新出土品で私の過眼したものを挙げれば、次のごとくである。

① 斜方雲文鈁　一九五七年河南省陝県戦国墓出土（「中華人民共和国出土文物展」〈一九七七年〉図録No.42）

② 越王勾践銅剣　一九六六年湖北省江陵県望山一号楚墓出土（「中華人民共和国出土文物展」〈一九七三年〉図録No.29）

③ 蟠螭雲文壺　一九六六年陝西省宝鶏戦国墓出土（「中華人民共和国古代青銅器展」図録No.67）

④ 雲文獣尊　一九六五年江蘇省漣水県前漢墓出土（「同①」図録No.43）

⑤ 幾何文壺　同右。（「同③」図録No.90）

⑥ 銅鹿　同右。（「同③」図録No.91）

⑦ 狩猟文筒形金具　一九六五年河北省定県前漢墓出土（「同①」図録No.62）

以上の諸器は⑥を除き、錯金銀手法をも加えられたきわめて手のこんだものであるが、とりわけ②と⑦は贅をつくしている。ことに⑦について史樹青氏は、注4前掲書に〝鬼斧神工〟とまで称して詳述している。なお同氏は緑松石の鑲嵌技術を解説して、大要、「殷周期の鑲嵌緑松石銅器の緑松石の多くは、片状か玦状で、鋳ておいてから仕上げる。細かく嵌めるときは漆液で粘付したのち、磨きをかける。〝越王勾践剣〟は、剣格正面の獣面紋は碧琉璃を嵌め、背面の獣面紋は緑松石を嵌めていて、その表面は磨いた痕跡が顕著である」といい、また一九六四年、山西省臨淄出土の「金銀錯緑松石三紐大銅鏡」が、錯石されていることから、鑲嵌緑松石銅器は、多く磨錯されたもので、金錯と並称されたことをも指摘している。

なお、⑥については、造型美に心を奪われ緑松石象嵌の有無を見落した。いま図版でも識別しがたいけれども、記録では背・臂・脛・耳部に鑲嵌しているという。[19] ⑦はつい先ごろ過眼したものだが、車飾に用いられたとされる金具のそれは、精緻な金銀技法のほかに、数多くの円形と菱形の緑松石がまる味をもたせて、器外に凸出して象嵌されていた。②を除く他の五器が

器体の表面と同じ高さに嵌められていて、ごく薄い板状になっているのとは差があり、ひときわ豪華であった。

さて、この銅盒硯の数多い緑松・青金石、紅珊瑚は、脱落してしまって原状不明のもののほかは、円形、楕円形、勾玉形などの全部が、まる味をもって器外に凸している。石の表面も磨かれているのだろう光彩陸離として、⑦に匹敵する手のこんだ鑲嵌技法である。銅盒硯は技術面でもこうした類例の優品であるといえよう。

ところで、鍍金および錯金銀をともなう象嵌緑松石青銅器の出土地は、南北にわたって分布していて、その中心地はいまのところ推定できない。が、銅盒硯の出土地の徐州市（ほぼ東径一一七度二十分、北緯三四度二十分）近郊である銅山県小亀山前漢墓出土品中の銅熏、銅虎、銅鳥飾、熊形銅器足、銅帽等の鍍金銅器類の報告[20]、それに徐州市よりさほど遠くない前述の漣水県三里墩（ほぼ東径一一九度二七分、北緯三三度七五分）墓から、錯金銀および鑲嵌緑松石の銅鼎、銅壺、銅犠尊、銅鹿、銅鐏等の出土品をみていることは[21]、単なる暗合とは思われない。それに、漣水出土の「銅鐏」が人身に鳥の頭と爪を、足は馬蹄の怪獣の形象をつくるのや、「獣形金帯鉤」二種の、ことに二式のそれは、鉤端は牙をもつ獣頭で、鉤身は目を瞋らせ牙をむき爪を生やした四肢、長い耳と両角を具えて両側に小蛇を蟠繞させた怪獣、というまことに奇妙なかたちをしている[22]。もとより銅盒硯の獣形とは異なるけれども、一脈通じる感覚――のちに述べる神仙思想に根ざしたそれ――が盛られているように思われる。総じていえば、戦国末から前漢にかけての銅器の装飾技法の系統が、なお後漢時代このあたりの地に継承され、優秀な工人が育てられていたものと考えられる。

◇

銅盒硯を開いた状態は、視ることができなかった。ただし蓋を取った写影では、硯身の上に釣鐘状のもの（研墨石。また磨石ともいわれ、墨を硯に磨りあわせる用具）が立ててある。蓋の内部にこの研墨石の納まる空間をしつらえてあるのか。蓋は伏せて置かれているため、この辺の事情はわからない。『図録』の説明文にもこのことに触れていないが「蓋の内側に石の硯板をはめこんでいる」という。「蓋の内側」というのは、下底部の硯身をさすのだろう。ただし石板の占める割合も不明である。ところで宇野雪村教授は、一九七二年三月、故宮博物院慈寧宮で催されていた「文化大革命中出土文物展」で銅盒硯を実見された。日本人ではおそらく初の過眼者であろう。だがその内面はやはり見ることを許されず、同行の坂田玄翔君が、添え

られていた硯身を示す写影（図2）をスナップした。宇野教授は、のちにその折の印象を発表されている。[23] さきごろ両氏より的聞したところ、盒の上下の合わせ目に墨のあとがみえたこと、下底部には嵌石していたこと、硯面に磨墨の痕跡らしい影があったと言われる。とすれば、墓主生前の実用硯ということになる。

中国の新出土硯は、『文物参考資料』、『考古通訊』以来、多種の報告があり挙げきれないが、新出土硯を中心として、体系的に硯史を考察したのは王治秋氏である。その論考は『文物』一九六四年第一期の「刊登硯史資料説明」にみえ、資料の出土硯は、以後一九六五年第十一期まで同誌に連載された。うち〈硯史資料一〉に、漢代の獣足石硯・十二峰陶硯・三種の陶器硯、〈硯史資料十二〉に双鳩蓋三足石硯・天然卵石硯・三熊足帯蓋石硯が挙げられているが、[24] その後これらを遡る出土硯が報告されている。銅盒硯もとよりその一つであるが、管見に入ったものを時代順に挙げれば、次のごとくである。

(A) 湖北省雲夢睡虎地戦国晩期秦四号墓出土石硯

一九七六年の出土で、現在知られる最古の硯。鵝卵石製で不規則の菱形状。長六・八―七、寛五・三―六センチ。墓主入葬の時期は、椁室門楣上の刻字（「五十一年曲陽徒邦」）により、秦昭襄王五十一年、二五六B・Cとされる。ちなみに研墨石と墨一塊が伴出した。また硯面と研墨石の面に磨墨した跡がみられるという。[25]

(B) 湖北省江陵鳳凰山前漢一六八号墓出土石硯

一九七五年出土。墓主入葬の時期は、有紀年竹牘（文帝初元十三年）により一六七B・Cとされる。墓主の名（もしくは姓）は遂。県令に相当する任官者と推定。硯の石質は未報告だが、円形をなし底径九・八、厚一・八センチ。これも研墨石と墨が伴出し、また硯面と研墨石（高三・五センチ）の底部に磨墨の跡があるという。これらは竹笥の中に納められており、他に筆一支、墨五塊（発見時、多く砕けていたが、一塊はほぼ完整で瓜子状をしていた）、無字の木牘、削刀があって、書道文房史上の貴重な資料である。ちなみに五百件に及ぶ珍貴な随葬品と、それにもまして、保存のよい男戸が発見されたことで、馬王堆一号漢墓の女戸についで、内外の耳目を驚ろかせた。[26]

(C) 湖北省江陵鳳凰山前漢八号墓出土石硯

一九七三年出土。墓葬の絶体年代は不明であるが、諸種の事例により、文帝より武帝元狩年間（一七九―一七七B・C）であろうとされる。[27] 礫石製の扁平な円餅形。これも釣鐘状研墨石が伴出し、また磨墨の跡がみられるという。

(D) 江蘇省海州前漢晩期霍賀墓出土木盒硯

一九七三年出土。墓葬の絶体年代は不明であるが、器物上の書体などから、前漢晩期だとされる。墓は夫婦合葬で、この硯は男子の棺内に置かれている。これは類例を見ない硯である。盒の長二二・九、寛七・六、厚一センチで、上下一合の木製の外匣の中に石板をはめている。なお盒蓋の裏面には、八分体を雑え、大小不同二十余字を墨書している。[28] この期の八分としては、珍らしい遺例である。

(E) 河南省済源前漢最晩期八号墓出土石硯

一九六九年出土。墓葬の絶体年代は不明であるが、墓の結構法と出土五銖銭の形制等により、元・成・哀帝期（四六～一B・C）とされる。長一二、寛四・七センチ。硯面には朱色が残っていたという。[29]

以上は凡そ新代までの新出土硯で、いまのところ後漢前期の出土例はない。銅盒硯は後漢中期墓（一一七年ごろ）の出土である。ついでに後漢晩期の出土硯を挙げれば、次の三件がある。

(F) 河南省霊宝三号墓出土石硯

一九七二年出土。墓葬の絶体年代不明。円形硯で周辺に朱を塗っている。直径一五・八、厚〇・九センチ。[30]

(G) 甘粛省嘉峪関三号墓出土石硯

一九七二年出土。墓葬の絶体年代不明。青碧酸岩製で、長二一・五、寛一四・二、厚〇・五センチ。すでに一角が断砕されていたが、磨墨の跡が見られたという。[31]

(H) 安徽省亳県一号墓出土石硯

一九七二年出土。墓葬の絶体年代は不明であるが、出土の陶器や貨幣から後漢末期とされる。青石質の硯で、長一六・七、寛七・六、厚〇・七センチ。これも研墨石が伴出しているが、下は方形、上は円形である。[32]

以上のうち(D)と銅盒硯以外は、単独の石硯である。ただし(D)の特例も、銅盒硯の超自然的な怪異な風貌と、目にもまばゆい鍍金・嵌玉の硯製には、及ぶべくもない。余談にわたるが、中国人民郵政の切手（一九七三年、八分）にもなっている。

◇

ここで再び銅盒硯の〝獣形〟を観てみたい。その全形は、結語すれば鼇をかたどっていると私は思う。

『古今図書集成』〈禽獣典〉鼇部に、およそ亀属とは思えない図が掲げられている。それは、五つのそそりたつ山を背負って、竜にひとしい頭をもたげ、三指を具えた前足を水中にふんばった図である。さらに「海獣葡萄鏡」に、ある種の獣紐があって、銅盒硯—海獣葡萄鏡獣紐—鼇図のそれは、一系の形であると思われる。

ただ疑問に思うのは、唐鏡の海獣の名の由来と、八稜鏡で海獣葡萄鏡の獣紐に類似する紐を有しているのに、狻猊等の別名を冠して称せられる唐鏡の有ることである。そこで鏡鑑の専書を電覧してみたところ、海獣葡萄鏡は、唐代に現れた飾紋で、その海獣についても、つとに衆説のあることを知った。すなわち〝海獣〟とは、「海外の獣」[33]ないしは「海外から来た獣（または馬）」[34]で、一般には「ライオンを指す」[35]意と解されているらしい。ただし樋口隆康教授は『三才図会』の海馬の項に引く、『隋書』西域伝〈吐谷渾〉の条にみえる「青海の竜種から生れた駿馬」のことであるという竜馬伝説から着想して、「同じ葡萄鏡の中には、馬以外の動物があったので、この方は〝海獣〟としたのであろう」とされ、「ブドー—唐草文の西方図案と、西域伝来の名馬とを背景として、〝海馬〟という名がもっともふさわしかった」からで、「ブドー—唐草文は、ガンダーラ仏教美術にともなって中国に入ってきたとみられなくはない。ただ唐鏡にみる海獣ブドー文は、ブドー唐草文は下地の図文であり、禽獣文が重ねられたのであって、両者は構成上遊離しており、禽獣自体が中国的禽獣文を主体としている点で、中国的変容をうけたものということができよう」と結論されている。[36]この説ははなはだ示唆に富む。海獣葡萄鏡ないしは八稜鏡等の内区の禽獣は別として、獣紐の獣は〝狻猊〟というよりは竜馬に近く、竜馬が水と強く結びつくことからして、唐代の海獣の祖形は、直接に結びつかないとしても鼇とも類し、さらには銅盒硯の獣形と一系とみてよいのではないかと私は考える。

一体、鼇は亀類に属されているが、もとより仮空の霊獣である。かつて温禎祥氏に伺った中国の俚諺に「四書五経、雖然唸透了、龜・鼈・龜・鼈・竈、仍認不了」がある。四書五経を読破したというが、この五字の区別はまだわからんじゃないか、という学問を鼻にかける半可通をからかう諷喩である。いかにも、筆画は複雑で、字の下部はまぎれやすい。この亀類の字のうち鼇だけは伝説の獣である。

鼇は神仙伝説に二種みえる。一は「鼇山（または鼇戴）」伝説であり、一は「女媧蒼天」のそれある。まず前説については『列子』湯問篇に、

渤海之東、不知幾億万里。有大壑焉。実惟無底之谷。其下無底、名曰帰虚。（中略）而五山（岱輿・員嶠・方壺・瀛州・蓬萊）之根、無所連著、常随潮波、上下往還、不得暫峙焉。仙聖毒之、訴之於帝。帝恐流於西（四）極、失群聖之居、乃命禺彊、使巨鼇十五、挙首而戴之、迭為三番、六万歳一交焉。五山始峙而不動。云々。

とある。のちの『文選』の張衡「思玄賦」に、「登蓬萊而容与兮。鼇雖抃而不傾」というのは、この話と『楚辞』天問の「鼇戴山抃、何以安之」の句を合したものである。ちなみに「思玄賦」のこの句に李善は『列仙伝』を引いて「巨鼇背負蓬萊山、而抃於滄海之中」と注している。抃は両手を搏つ意で、『爾雅翼』にはまた「鼇之性好抃楽。故今称好楽者、為鼇頭」といっている。

以上を要するに、鼇は禺彊に召され、渤海の東の帰虚に在って五仙山を負い、ときに仙人の楽奏を聞けば手をうって楽しむという霊獣にみたてられている。ところで『説文新附』に「鼇、海大鼈也。从黽敖声。五窄切」とみえる。海に住む大スッポンというのである。『新附』の文字は『説文』に四〇一字みえるが、もと小徐本にはなかったのを、徐鉉が『説文』を校定したとき、当然なくてはならない文字として、新たに加えたものである。『説文解字詁林』〈鼇〉部に引く紐樹玉『説文解字新附考』には、『芸文類聚』巻九六に引く『列子』が「巨鼇」を「巨亀」に作っているため、鼇は後人の改めたものであること、『玉篇』に引く『列仙伝』に「有神霊之鼇、背負蓬萊之山在海中」とみえることから、鼇に作るのは列仙伝に始まるとし、亀と鼇とは本来声の近いための改字だと例証している。ただし、『楚辞』天問に「鼇戴山抃」とあり、『後漢書』張衡伝に「鼇雖抃而不傾」とあるのをみると、鼇字は〈天問〉篇に初出するが、義は怪誕にわたるから、許慎は『説文』に採入しなかったのであろう、といっている。

また『詁林』に引く鄭珍の『説文解字新附考』には、ほぼ紐説を襲うものの、『淮南子』冥覧訓の高誘注、『楚辞』天問の王逸注、『列子』湯問の張湛注が、等しく「鼇、巨亀也」というのは、物の大なることを形容して「敖」といったものだとしてその例を挙げ、周末に巨亀が仙山を背負するという伝説が生れた、始めはそれを敖の音で称して専字がなかったのを、造言者が鼇と作字したものだと推量している。したがって鼇と亀とは一物であるから、鼇を亀と改めても妨げはない。だから『芸文類聚』引の『列子』は亀としたものである、『一切経音義』に『字林』を引いて「鼇、海中大亀」といっているのは、古説によっているためで、徐鉉がこれを『新附』に「大鼇」と改めたのは失考である、と論証している。

『爾雅』に鼇字のみえないことなどを考えあわせ、紐・鄭の説には理がある。馬鹿でかい亀を「敖」音で称したまでであろ

う。ただしかし、巨亀が仙山を負うという神仙説が、『楚辞』の書かれた時代に生じていたことは事実であるから、神仙説の盛んな漢代において、信奉者の間で超自然的な霊獣としての鼇形がつくられると考えても、不自然ではあるまい。ちなみに『抱朴子』外篇〈喩蔽〉に「巨鰲首冠瀛州、飛波浚乎方丈（壺）」とある「鰲」は、『正字通』に鼇の俗字としているように、これも『楚辞』などと一系の話である。これと関連して亀が仙人を乗せまた人を負う説話も他に散見するが、[37] 新出土品にも、『列子』の説話に基くと思われるものがある。

一九六九年、河南省済源県出土（8頁、(ロ)項と同時同所の随葬品）の「陶亀座博山炉」である。報告書によれば、通高二四センチ、蓋の周りは山巒を重畳させ、その間に薬を搗く兎、鳥、竜、獐など八種の怪異な風貌の鳥獣が居り、蓋の頂上には鷹が一兎を啄えている形を、それぞれ立体的に塑し、炉下の円柱の両側には人面を浮き出させ、柱下は首を昂げた亀（鼇？）を写実的に塑し、亀甲は円点で表し、通体に緑釉をかけてあるという。[38] 報告には触れていないが、まさしく亀（鼇）が仙山を負う形象である。模写図でみるかぎり、蓋の奇妙な諸鳥獣や柱側の人面等は、まさに神仙説話中の類であって、鼇山伝説と通じる。（なおまた、この第十六号墓からは一件、紅褐色釉の陶亀座灯が出ているが、詳細は不明。）いま一つ、前述（7頁）の十二峰陶硯（同書、図版弐参照）は、通高一六・五、長二一・七、寛二一・二センチで、三山各四峰の形である。王氏は前漢のものと推定し、解説では、左右の山下に仙人があって山を負い、三足が畳石状につくっているという。ただし、図版では判然としないが、人面の下にまた一獣形を塑しているようにもみえ、これも鼇形で鼇山伝説に拠るのではないかと思われる。

余談にわたるが、十二峰陶硯が何故、主三山につくるかといえば、五神山伝説のほかに三神山伝説があるからである。即ち前引の『列子』の文につづいて「而竜伯之国有大人。挙足不盈数歩、而曁五山之所。一釣而連六鼇、合負而趣帰其国、灼其骨以数焉。於是岱輿、員嶠二山、流於北極、沈於大海。仙聖之播遷者、巨億計。云々」とある。岱輿・員嶠が大海に没すれば、残るは方壺（丈）・瀛州・蓬萊三神山で、これこそ『史記』〈秦始皇本紀〉・〈封禅書〉、『漢書』〈郊祀志〉等にみえる三神山である。もとより神仙説中の絵そらごとであるが、この陶硯の三山もまた神仙の居所をしめすものである。

また一九五四年山東省沂南より後漢末と推定される画像石墓が発掘されたが、その中室の八角擎天柱の柱身西面に、首の長い鼇状でとぼけた顔面を有しているものの、その三山の上部には天帝らしい座像があり、他に奇獣怪鳥が刻されているところから、[39] これもおそらく巨亀すなわち鼇戴説話に拠ると思われる。

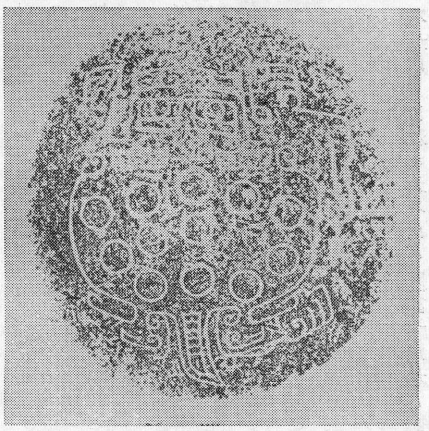

図3　亀文拓影

ちなみに「巨鼇負山」の説話については、藤田豊八「支那に伝わる二三のMythにつきて」[40]の考察があり、印度の説話の影響とみる。これに対し、出石誠彦「上代支那の『巨鼇負山』説話の由来について」[41]は、この説話が漢民族独自の思想発達上より形成されたものとして論及している。が、鼇・鼈・黿等を亀類一般に含め、なお鼇形については考察されていない。

鼇の関わるいま一つは、有名な「女媧蒼天」の神話である。すなわち『淮南子』冥覧訓に次のごとくいう。

往古之時、四極廃、九州裂。天不兼覆、地不周載。（中略）於是女媧、鍊五色石、以補蒼天、断鼇足、以立四極、殺黒竜、以済冀州、積蘆灰、以止淫水。蒼天補、四極正、淫水涸、冀州平。云々。

右のうち傍点部は、『史記』三皇紀、『列子』湯問、『論衡』談天にも、ほぼ同文としてみえる。鼇山、女媧蒼天の話は、道家思想と関連するものであろうから、鼇は神仙説の盛んな時代に創り出された超自然的霊獣であったことがわかる。

『古今図書集成』の図は、もとよりこうした伝説の想像図でしかない。が、図に竜頭に近くつくったのは、実在の亀鼈では、仙山を負い帰虚に浮ぶにはふさわしからぬと考えて、竜種と混血させた図様をひねり出したものであろう。銅盒硯の外貌も同じく鼇という確証はないが、おそらくこれと同じ意識で作製されたものであろうし、強いて言えば、硯が水なしでは用をなさない器であることは、鼇の住む帰虚の水中と関るだろうし、玉匣を着こんだ墓主が神仙思想にかぶれ、死後の永遠を希って、金色粲然と鍍金し、さらには青・緑・赤の宝玉を嵌めこんだ霊獣を随葬品として壙中に置いたことも、われわれに神仙伝説の鼇形を想起させる理由である。

さらに銅盒硯が鼇形を証す点を蛇足すれば、青銅器紋飾の一に亀文のあることである（図3）。それは多く盤の内面に施され、一般に亀の全形を俯視形に象っている。その顔面は、瓶形の角をもつ蟠竜文の形相とよく似て、また銅盒硯の顔とも一類である。心なしか緑松石象嵌の主意は、青銅器亀甲の円形につくることより転化した文様をあらわすのではないかと思う。亀

文は殷代に盛行し、春秋戦国期になお沿用されたという。[42] 水容器に用いる亀文が尾をひいて、神仙説話の鼇形を想起し、ひいては、この〝鍍金緑松石等象嵌鼇形盒硯〟の形象になったものと私には思われる。

（一九七七年十二月四日稿）

〔注〕

（1）これよりさき一九七一年八月十四日の『新華日報』に、「徐州漢墓和丹陽南朝墓的情況」と題して報告されたらしいが未見。

（2）『後漢書』巻五〇〈孝明八王列伝〉参照。

（3）夏・呉両氏とも「鎏金」とするが、鍍金と同意。『集韻』に「鎏、美金謂之鎏」とあり、全面金彩様の形容語として用いられる。因みに「鍍」は『集韻』に「鍍、以金飾物、通作塗」とあり、銅・銀などに極めて薄い金を、かぶせ塗り（金メッキ）する意である。

（4）史樹青「我国古代的金錯工芸」（『文物』一九七三―6）六六～七二頁参照。

（5）注(4)前掲書七一頁、〈余論〉3「石錯銅器」参照。

（6）「土多金銀奇宝。有夜光璧・明月珠・駭鷄犀・珊瑚・虎魄・琉璃・琅玕・朱丹・青碧。云々」とある。銅盒硯象嵌の三種の玉名は、ともにここに見えているから、大秦産の舶載と考えるのが穏当かもしれない。

（7）「広東徐聞東漢墓」（『考古』一九七七―4）二七二頁参照。但し、琉璃とは別石のごとく記している。

（8）「青海楽都柳湾原始社会墓地反映出的重要問題」（『考古』一九七六―6）三六八頁参照。

（9）「一九七五年安陽殷墟的新発現」（『考古』一九七六―4）二七二頁および図版捌―10参照。

（10）「殷墟考古発掘的又一重要新収獲」（『考古』一九七七―3）一五二頁参照。

（11）「遼寧朝陽魏営子西周墓和古遺址」（『考古』一九七七―5）三〇八頁参照。

（12）「陝西戸県宋村春秋秦墓発掘簡報」（『文物』一九七五―10五九頁、および六五頁挿図二七参照。

（13）「江蘇六合県和仁東周墓」（『考古』一九七七―5）二九九頁参照。

（14）「山西長治分水嶺126号墓発掘簡報」（『文物』一九七二―4）四三頁参照。

（15）「西昌壩河堡子大石墓発掘簡報」（『考古』一九七六―5）三二八頁参照。

（16）「雲南江川李家山古墓群発掘簡報」（『文物』一九七二―8）一一頁参照。

（17）「嘉峪関漢画像磚墓」（『文物』一九七二―12）三一頁〈嘉〇関新城漢墓出土器物表〉参照。

（18）「湖北江陵藤店一号墓発掘報告（『文物』一九七三―9）九頁、「曲阜九竜山漢墓発掘簡報」（『文物』一九七二―5）四三頁、および封底の裏面図版、「河北定県43号漢墓発掘簡報」（『文物』一九七三―11）九頁、および図版参～1・2・3、注(15)前掲書同頁など参照。なお瑪瑙・赤色石・青色石・黒色珠・ガラストルコ玉などの象嵌青銅器も報告されているが、緑松石の象嵌例が最も多い。

（19）「江蘇漣水三里墩西漢墓」（『考古』一九七三―2）八四頁参照。

(20) 「銅山小亀山西漢洞墓」(『文物』一九七三―4)二一～三五頁参照。
(21) 注(19)前掲書。
(22) この銅鐸・金帯鈎とも、注(19)同右書の挿図四の2・7、および図版拾貳の3参照。
(23) 『古名硯』附冊「補遺・雑器―硯譜、出土古硯概説」(二玄社刊)参照。
(24) 王氏は、右のうち三種の陶亀硯について図版の標題に「漢」としているが、一九六二年河南省上蔡県唐墓出土の直頸単亀陶硯がこの三種の一のそれと類似しているため、なお断定をためらっている。宇野雪村教授も藤井有鄰館蔵硯や町春草氏蔵硯にこの式のものがあり、この三種の陶硯は漢か唐かの時代比定に苦しむといわれる(『古名硯』附冊「出土硯概説」二八、二九頁参照)。なお後考を俟たねばならない硯である。
(25) 「湖北雲夢睡虎地十一座秦墓発掘簡報」(『文物』一九七六―9)五三頁、および図版漆の5参照。なお椁室紀年銘模写図は、挿図三にみえる。
(26) 「湖北江陵鳳凰山一六八号墓発掘簡報」(『文物』一九七五―9)四頁、および図版貳参照。
(27) 「湖北省江陵鳳凰山西漢墓発掘報告」(『文物』一九七四―6)五〇頁、および挿図十参照。
(28) 「海州西漢霍賀墓清理簡報」(『考古』一九七四―3)一八四頁、および挿図六参照。
(29) 「済源泗澗沟三座漢墓的発掘」(『文物』一九七三―2)四八頁参照。
(30) 「霊宝張湾漢墓」(『文物』一九七五―11)八一頁、および〈随葬器物統計表〉参照。
(31) 注(17)前掲書二八頁、および出土器物表三二頁参照。
(32) 「亳県鳳凰台一号漢墓清理簡報」(『考古』一九七四―3)一九〇頁参照。
(33) 浜田青陵「ヒルト氏の支那古銅器、殊に海馬葡萄鏡に関する研究」(『国華』一七四号)
(34) 原田淑人「海獣葡萄鏡に就て」(『史学雑誌』28―1)。
(35) 『漢鏡と隋唐鏡図録』(京都国立博物館刊)図版20下〝海獣葡萄方鏡〟(12頁)、鈴本博司解説参照。
(36) 「海獣葡萄鏡とは何か」(『歴史と人物』四七―10)参照。
(37) 『洞冥記』巻二、『捜神後記』巻十、『晉書』巻八一毛宝伝。ちなみに梁の「始興忠武王碑」をはじめその他に見える亀跌も、あるいは鼇戴伝説と関連するのではないかと思われるが、いまは直接しないのでのちに預る。
(38) 注(29)前掲書五二、五三頁解説、および挿図十参照。
(39) 『沂南古画像石墓発掘報告』(曽昭燏等合著。文化部文物管理局一九五六年出版)図版66参照。
(40) 白鳥庫吉博士還暦記念『東洋史論叢』所収。
(41) 市村博士古稀記念『東洋史論叢』所収。
(42) 『文物』一九七七―7、七七頁〈小辞典〉参照。